

光吉夏弥

——その生涯と時代

講演者 澤田 精一氏

(絵本研究者)

日時 2018年6月23日(土) 14:00~16:00

会場 白百合女子大学 9012教室

はじめに

私と光吉さんの関わりは、「子どもの本の世界から」という連載の担当者だったことです。この連載は児童文学専門誌「子どもの館」の1974年7月号から始まったわけですが、私はその12回目から、つまり1975年6月号から連載終了までの1980年7月号まで担当いたしました。「子どもの本の世界から」は、おもに欧米の絵本作家、児童文学者が、どのような媒体で誰が論評しているかを詳らかにしたものです。普通、ヴァージニア・リー・バートンを研究しようとしたら、作品リストとともにその作家を論じた文献を探し、一覧にするでしょう。その作業を1人の作家にとどまらず、多くの作家に対しておこなったんです。無論、連載終了といってもこの作業には終わりがありません。新しい資料がでるわけですから。その後も、そして「子どもの館」が終刊した後も、お手伝いは続けました。

そのころの光吉さんは70歳代でした。最初に福音館書店でお目にかかったときは夏で、蝶ネクタイに麻のジャケット、帽子をとりながら光吉ですと挨拶された姿は忘れることができません。御自宅は大田区東雪谷。玄関をあがると廊下が続いていて両側は本棚、床から天井までびっしりと本が並んでいました。本棚をのぞき込むのは失礼だと思い、そのまま進んでいくのですが、それでも右側の本棚には昔話や民話の本が並び、左側には戦後間もない出版だった中央公論社の「ともだち文庫」が並んでいるのを目の隅で見つけました。そしてその廊下が突き当たると、左側に階段があってそれをあがると、その左側の部屋、そこが書斎兼仕事場でした。大きな机に向かって右の壁にはピカソの「ドン・キホーテ」の複製が掛けられ、背後にはまた本棚があり、そこには海外の絵本がずらっと並んでいました。机に向かって左側に図書館カードのボックスが何段にも重ねられて、そのボックスにはABC順に作家のデータを打ち込

んだカードがびっしりと連なり、新しい情報が入ると該当するカードを取りだしては、レミントン製のタイプライターを使って左右の人差し指で交互に打っていました。そのカードから整理した情報を「子どもの本の世界から」として、毎月、渡されていたんです。

その大きな机の前には小さなテーブルと向かい合わせに椅子があり、そこで光吉さんと打ち合わせをしました。そのときは必ず紅茶ができました。カップの青い模様と縁が金色であったのはよく覚えています。ひととおりの打ち合わせが終わると、光吉さんの話し好きというか、あれこれ話題がでて、例えば「香港にいったことがありますか」と切りだしてくるんです。そのころの香港はイギリス領でしたから、英米で出版された書籍はほとんど揃っている、なにもロンドンやニューヨークに行く必要はないというのです。特に旧正月の香港はなかなかよろしいと。ですからホテルに泊まるのではなくて、ウィークリーマンションのような施設を利用して、本屋、古書店を巡って欲しい本を手に入れたら、まとめて船便で日本に送るとしていました。

光吉さんはこうした作家の情報をまとめて、いずれ出版したかったでしょうが、1989年3月7日、肺気腫のため亡くなられました。亡くなられた後、舞踊、写真、子どもの本という3つの分野での膨大な資料が残され、そのことで甲義子^{かよこ}夫人から相談を受けました。没後、『絵本図書館——世界の絵本作家たち』（ブック・グローブ社、1990）が出版されて、日本児童文学学会・特別賞を受賞したとき、授賞式がこの白百合女子大学だったんです。そのころは神宮輝夫先生、猪熊葉子先生、小澤俊夫先生と、子どもの本の世界での巨人が集まっていた、やはりここだろうと思い、神宮先生に相談して子どもの本の資料、1万3,000冊の窓口としての役目を果たしました。私はまだ若くて、そのとき入院中の甲義子さんにいわれたことを忠実にやるということで頭がいっぱいでしたので、1階にある仏壇、和筆筒、そうしたものを開けるということはありませんでした。今でしたら開けたと思います。光吉さんについては手紙、日記、その他、本人が書いたものがないんです。お子さんもいませんでした。石井桃子さんは自伝を書き、エッセイで身近にふれていますから、どのように生きてきたかわかるのですが、それだけに貴重な資料を見つける機会を失ってしまったわけで、今となっては残念です。もうひとつの反省としては、甲義子さんから庭に離れ屋があって、そこにも本があるということを知っていましたので、神宮先生と入ったんですけど、びっしりと世界中の観光、各国の情報の本が並んでいました。それで「これは関係ないですね」といって、白百合にはもってこなかったんです。光吉さんが慶應義塾を卒業の後、鉄道省の外局、国際観光局に入ったのを知ったのは後のことで、そこにはかなり観光に絡んだ貴重書があったはずですよ。

社会にでるまで

整理された光吉文庫を改めて閲覧することができて、いろいろなことがわかりました。まず、お父さんの元次郎さんについて。光吉元次郎さんは1867（慶応3）年に生まれて、1926（大正15）年に亡くなっています。光吉夏弥さんの本名は積男（つむを）で、長男です。それから長女で善子さん、そして次男の餘之介さん。このおふたりはかなり長生きされたと思うんですが、詳しいことはわかりません。三男の慶緒さんは生まれた年の翌年に亡くなられ、四男の有慶さんは慶應をでてから徴兵され、サイパン島で戦死されています。砲兵でした。大砲は重くて設置するだけでもたいへんなんですが、敵がきた、それって大砲を撃つでしょう。すると、どうしても白い煙があがるわけです。そうすると、あそこで撃つと敵にわかって、次に攻撃を受けてしまう。最初の1発は成功するかもしれないけれども、その後はどうなるかわからないんです。

光吉さんについて前から不思議だったことがいくつかあります。まず光吉さんはなんで徴兵されなかったのかということですが、お父さんが亡くなったとき光吉さんは21歳。慶應義塾の学生でした。21歳で戸主になったんです。戸主は徴兵されません。というのは戦死したらそこで家系が絶えてしまいますから、いかに極悪な戦前の軍隊といえどもそれはやらなかったんですね。

もうひとつは、慶應義塾の学生は予科3年、本科3年、都合6年で卒業するんですが、光吉さんは7年かかっている。予科で1年何かあったんだと思います。休学したのか、あるいは進級できなかったのか。舞踊の評論を21歳から書いているので、舞踊の研究に1年間かけたのではないかと思っていたんですが、あるいは光吉さんはあの時代では長身でしたが、胸が薄かったんです。もしかしたら結核を患ったのではないかとも思うんです。

そのことを考えていくと、まず元次郎さんからの話になります。元次郎さんも慶應出身で、日本綿花に入社します。それでインドのボンベイに日本綿花の最初の駐在員として赴きます。これは日本綿花の社史にもちゃんと名前が記載されています。綿取引の最前線で活動し、それからアメリカ、フィラデルフィアに渡って都合5年くらいで日本に戻り、落ち着いたところで光吉さんが生まれるんです。

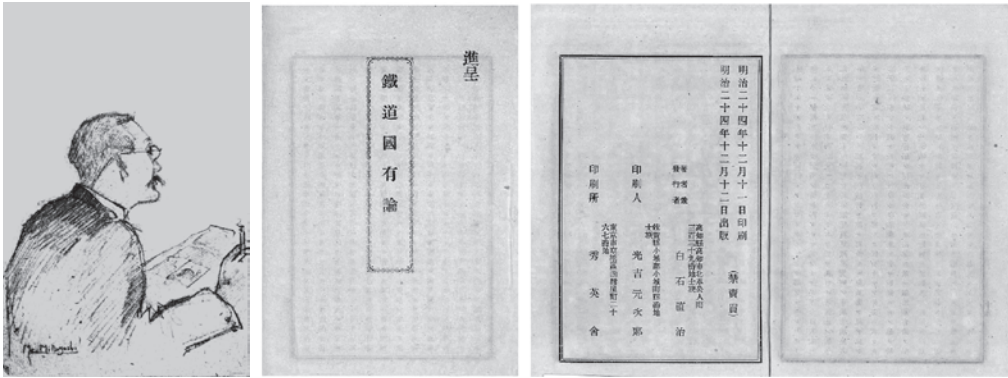
それで、お父さんも翻訳を出しているんです。最初はウィリアム・ドーソン『国家社会制』を哲学書院から25歳で出版するんですが、これは社会保険の先駆的な文献だといわれています。それからアメリカから日本に戻って、リッチモンド・スミス

『移住論』を39歳のときに出します。そこに大隈重信が漢文で序文を寄せています。これは白文です。私たちが高校時代に学んだような一两点とか、レ点全然ない、ただ漢字だけがずらっと並んでいる文章なんです。このように2人はかなり昵懇の間柄でした。それから、元次郎さんは何を思ったのか、頼山陽の研究に進みます。岩波文庫に『日本外史』の3冊本があるんですが、その3冊目に解説があって、そこに光吉元次郎さんがでてきます。かなり優れた民間の研究者でした。それで頼山陽研究なんです。『頼山陽書簡集』上下2巻、総ページ1,700ページを超える天金の豪華本です。編者は、徳富蘇峰、木崎愛吉、そして光吉元次郎。版元は民友社で、出版は1927（昭和2）年ですが、その前年に刊行を見ることなく突然亡くなってしまいます。病名はわかりません。

しかも『絵本図書館——世界の絵本作家たち』に光吉さんのエピソードが紹介されています。慶應で小泉信三が図書館長、あの当時の役職名は図書館長ではなくて監督という呼称でしたが、その小泉監督の特別な計らいで洋書を借りることができたと書いてあるんです。けれど、『慶應義塾図書館史』を見てみると、慶應義塾大学図書館は東大、早稲田に続いて3番目の蔵書数を誇って、閲覧自由だったんです。小泉信三に許可をもらうことはなかったんです。でもあえて許可が必要だったのは、やはり結核であったのかと思いたくなります。

それとは違って、許可が必要なのがありました。それはマルクス、レーニン関係の書籍です。当時の小泉信三がそこで許可を出したのが、野坂参三でした。後の共産党の議長。この『慶應義塾図書館史』を読んでいておもしろいなと思ったのは、野坂参三といえども生活に困るわけなんです。そのとき、その社会科学の本を慶應の図書館が買い上げていたんです。野坂参三だけでなく、その種の生活困窮者が書籍を慶應義塾へもっていきと買い上げていたというのです。このころの慶應義塾は、あの抑圧的な時代に迎合しない、腹が据わった組織でした。

元次郎さんは5年の海外生活があり、インド、それからアメリカにもいきました。ということで、かなり海外の生活には詳しくないかと思いますが。そういう家庭ならば洋書もあったろうし、証拠はないんですけども、もしかしたら英語の絵本もあったかもしれない。江戸時代は和服で、明治維新になって洋服を着る生活が始まるわけです。軍隊は全員洋服です。外国での生活に親しんでいたのなら、テーブルで食事をして、ベッドで寝て、その空間のなかに本とか雑誌とかがあったはず。光吉さんがどこで絵本を発見したかというのは、いろいろいわれていて昭和の初めごろかなと、私は思っていたんですけど、じつはもうちょっと遡れるのではないかと思います。



(白百合女子大学児童文化研究センター所蔵)

ともあれ、光吉さんは1929（昭和4）年に大学を卒業します。1929年の10月が世界大恐慌で、そのあおりを受けて1930年には慶應出身の学生といえどもなかなか就職できなくてというのは、当時学生だった池田彌三郎の証言があります。でも1930年に光吉さんは、鉄道省の外局、国際観光局に入局するんですね。ここでも卒業から就職までの1年のブランクがあります。これもなんだったのか。1929年に就職ということならばまだ条件が良かったのに、世界恐慌の影響がでた翌年に就職できた。就職できたのが国家公務員である国際観光局なんです。国際観光にもっと力を入れ、外客誘致政策という政府の方針がすでにあっただけで、なんとすれば観光での収入は当時バカにできないものになっていました。それで1927年からこのことは時の政府の問題になっていて、1929年の田中内閣の議会において設置が決まり、翌1930年に発足したのです。ですから、たぶん、この発足を知っていて光吉さんは翌年まで待っていたんじゃないか。となると、どうしてそういうことを知って待てたのかとなるんですが、ここでまたお父さんの元次郎さんになります。1891（明治24）年に白石直治の『鐵道國有論』の印刷人になっているんです。この冊子は非売品で、一種の建白書です。たぶん関係者に配ったものと思われる。著者の白石直治は元次郎さんより10歳年上。東京帝国大学理学部土木工学科を卒業、1890（明治23）年には関西鉄道の社長になっていて、鉄道の世界では重鎮です。その後、政友会の代議士となり、帝国土木会長になって、1919年に亡くなっています。元次郎さんは1926年に亡くなりますが、元次郎さんと白石直治とは印刷人と著者だけの関係だったのか。光吉さんが鉄道省の外局に就職できたのは、なんらかの関係がここから発生したのではないかと思っていますが、どうなのでしょう。

国際観光局とは

ではここに国際観光局の職員録をご覧にいれましょう。国会図書館では昔の鉄道省の職員録がデジタル化されて閲覧できるようになっています。

○国際観光局 局長：新井堯爾

・庶務課 書記官：長崎惣之助

事務官：高橋藏司

属：斎藤正雄、内山季明、林田健介、宮崎亮、奥山皓太郎、
伊東正璃、山本智一

事務雇：池田盛国、島田昇太郎、松本博、矢村輝彦、古宮由雄、
片平智、河合武、須藤静枝、志田ふく

・事業課 書記官：森本義夫

事務官：平井義富

属：長谷川雄三、市川八雄、中井辰一、坂場庸雄、羽田新三

事務雇：酒井健吉、庄野満雄、村尾せつ、土肥京一、光吉積男、
大林正二

技術雇：酒井勇雄、満井鎌太郎

1931（昭和6）年の最初の職員録です。この2つの課、30数名で日本の観光政策の中核的な活動をしていたんです。観光地や国際観光ホテルの整備、国際観光協会との連携、その他必要な政策立案をしていました。初代局長は新井堯爾、東京帝国大学卒です。新井の『観光の日本と将来』（観光事業研究会、1931）は、観光に絡んだ先駆的著作になっています。書記官の長崎惣之助も東京帝国大学卒、戦後に国鉄総裁になります。ここはエリート揃いでした。その後も、田誠が『観光事業論』（春秋社、1940）を著し、エスペラントの世界でも有名な井上万寿蔵が『観光読本』（無何有書房、1940）を著しています。

国際観光局は、民間からも発足が期待されていました。ジャパン・ツーリスト・ビューローの機関誌「The Tourist（ツーリスト）」では、「われら多年の希望であった国際観光局がついに新設された」とその喜びを記しています。

では、国際観光局が具体的にどんなことをしてきたかを見てみましょう。
まず、ポスター。



絵柄は「富士山、芸者」で、もう典型的な日本紹介のポスターです。タイトルというか惹句は「Beautiful Japan」、絵は吉田初三郎。1万枚刷ったといわれています。

そうかと思うと、これ、すごくモダンでしょう。「JAPAN」と大きな文字が入っていて、疾走する汽車からの車窓風景です。左下に小さく「satomi 37」とありますが、描いたのは里見宗次、当時のグラフィックデザイナーです。37は、1937年、昭和12年ですね。

これは上村松園の「序の舞」。何も文字は入っていません。絵の外に「BOARD OF TOURIST INDUSTRY」とあります。国際観光局の英語表記です。

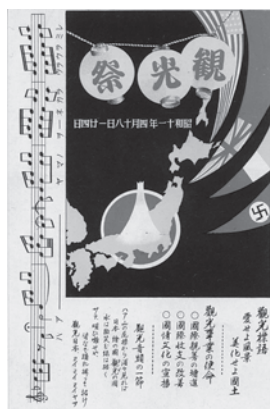
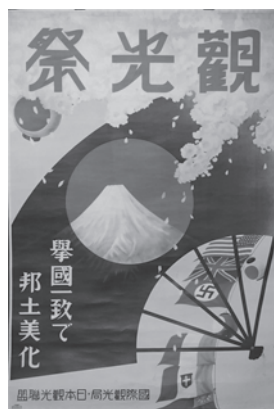
こういうポスターをかなりの数作りまし、いずれも1万枚は刷っていました。

それから、これは日本の紹介パンフです。タイトルは「日本」。表7面、裏7面で印刷して、折っています。なかの文章は中国語です。

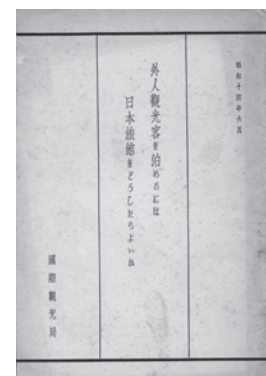
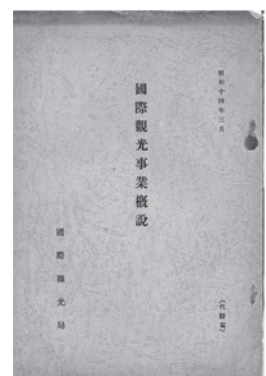
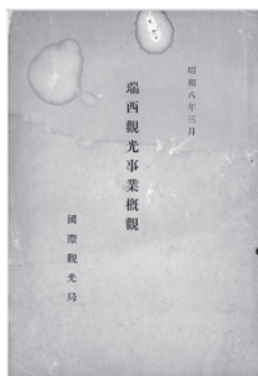
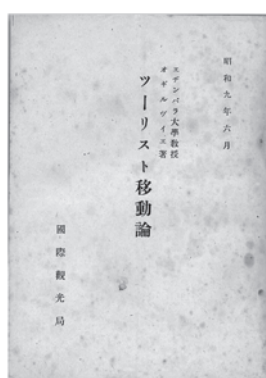
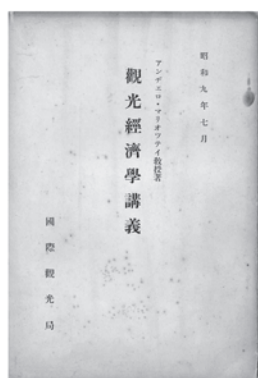


これはレコード。戦前ですからSP盤といわれている78回転のレコードです。落とすと割れます。国際観光局選定と表記された「観光音頭」と「旅の歓喜」という2曲

が入っていますが、現在、SP 盤を再生できる装置がないので紹介に留めます。ただ「観光音頭」というのはなんでしょう。じつは国際観光局は何種類もの「観光祭」というポスターを作っていて、実際に観光祭をやったようです。祭の内容はわかりませんが、そうして一般の国民の観光への関心をたかめようとしていたと思います。



さて、国際観光局は観光を実施していくにあたって、文献を翻訳していました。初めて観光事業の中心となる国家機関ですから、観光のイロハから始めたんだと思います。どれも国際観光局・訳で人名はでてきません。奥付もない、値段も表記されていません。表紙もぺらぺらの紙で印刷されているので、内部資料という雰囲気です。



- 『伊太利外客誘致機関ユニットに就いて』 マヨーニー（訳）1930
- 『外客往来の経済的意義』 ボドロネフェルド（訳編）1931
- 『諸外国のツーリスト事業に対する奨励策』 米国商務省（訳編）1931
- 『イタリーに於けるツーリスト移動統計 1929年度』 アヴァンチーニ（訳編）1932
- 『観光経済学講義』 アンヂエロ・マリオッティ（訳）1934
- 『ツーリスト移動論』 オギルヴィエ（訳）1934
- 『観光事業概論』 グリュックスマン（訳）1940

むろん国際観光局が、独自に作った資料もあります。いずれも同じ簡素な装幀です。

- 『米国の内外旅行状況』（編）1930
- 『ツーリスト事業助長に対する諸外国に於ける政府の援助』（編）1930
- 『国際観光委員会ノ答申：諮問第一号関係』（編）1931
- 『国際観光委員会山ノ座談会記録 第1、2回』（編）1931
- 『独逸青年宿泊所連盟概観』（編）1931
- 『仏蘭西のホテル貸付銀行に就いて』（編）1931
- 『瑞西観光事業概観』（編）1933
- 『全国観光機関調』（編）1933
- 『外国に於ける観光宣伝印刷物』（編）1934
- 『国際観光事業概要 昭和8年度』（編）1934
- 『入国外人数統計 昭和7至9年度』（編）1933-35
- 『仏蘭西旅行組合連盟協会の組織と事業』（編）1935
- 『1936年オリンピック大会調査資料』（編）1937
- 『外客は斯く望む』（編）1938
- 『国際観光事業概説』（編）1939

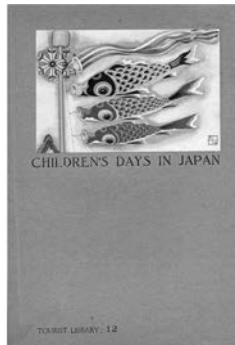
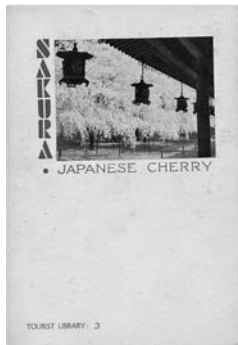
『外人観光客を泊めるには日本旅館はどうしたらよいか』という26ページほどの小冊子が、やはり国際観光局で出されていますが、これはホテルに配ったものだと思います。浴槽やトイレを図解しています。

その他、「Pocket Guide to Japan」は、184ページの日本観光案内。「Japan」、これはパンフレットとっていいでしょうね。



しかし、いずれにしても“Japan”のなかに、台湾、朝鮮、満州が入っているのを見過ごすことはできません。当時、日本といえばそういう地域も含んでいたんです。

「Tourist Library」これは1冊で1テーマ。桜とか、歌舞伎とかで40タイトル出版しました。しかし、そのなかに「アイヌ」の1冊があるんです。アイヌの生活と文化を扱っていて異色です。とにかくいろいろな種類の刷り物、出版物を出しています。絵葉書などもありました。



では、光吉さんは何をやったかという、先ほどの国際観光局での翻訳をやっていたとも思うんですが、名前があがってこないのわかりません。はっきりしているのは「Travel in Japan」という季刊誌の編集長です。A4の大きさで、おもに英文での発行です。年4回、2万部ほど刷ったといわれています。24号まで出ました。「FRONT」「NIPPON」と比べると、観光目的のためか、だいたい写真がおとなしいです。このことは後ほど詳しく確かめましょう。

平和への希求

観光というのは平和じゃないと観光にはなりません。戦争になったら観光はできな

いですよね。1931年に満州事変があり、1937年に日中戦争が始まり、ついには1941（昭和16）年の真珠湾攻撃で太平洋戦争、広大な太平洋をめぐる戦争になっていて、最後はもう本当に消耗戦で日本は負けるんですが。

国際観光局が作った映画のリストが残っています。京都や奈良、瀬戸内海などを撮った観光地を紹介する映画が多いなか、不思議なのが2つあって、『日米学生会議』と『人形の交換』というタイトルがあったんです。まず「日米学生会議」というのは何かというと、現在の「日米学生会議」のサイトにその沿革が記されていました。ちょっと長いのですが、ここに引用しましょう。

日米学生会議は1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

公式的な説明はこうでしょうが、人名がでてこないのを改めて紹介しますと、中山公威（青山学院）の発案で、田端利夫（慶應義塾）、板橋並治（明治）の3人が発起人です。4名でアメリカにというのは、アシスタントが1名ついたということで、実際のアメリカでの交渉は田端、板橋の両名が担当し、中山は途中で帰国して日本での準備活動にあたりました。当初なかなか国内では理解されなかったようです。ですがここで国際観光局が手助けをするんです。資金と人脈の紹介に努めました。鉄道省の外局とはいえ、かなり独自の行動をとっていた。それで第1回の日米学生会議は日本で、青山学院でおこなわれました。その模様はラジオで報道されたそうですが、いったい何を議論しているのかと特高が会場の外でうろうろしていたそうです。しかし、

日米の学生の間での会議は厳しいところもありました。特にアメリカの学生からは、このように1人1人意見が違う、立場も違う、アメリカの政府に対して批判的な学生もアメリカ側にはいる。しかし、日本の学生は多少の意見の違いはあっても押し並べて同じような意見をいう。おかしいのではないかと、問われた。これは今の時代でも似たような印象を私はもちます。

そして『人形の交換』ですが、まず前段として1924（大正13）年にアメリカでのいわゆる排日移民法の成立があります。日本人だけを対象にしたのではなく、白人以外の人種の移民を禁止しようとしたものだったのですが、日米間に不安が走りました。そこでアメリカの宣教師・ギューリックが、国際親善は大人同士がおこなうよりも子どもたち同士で育んでいったほうがいと提案し、日本では渋沢栄一がこれに呼応したのです。そこで人形を交換しようということになり、まずアメリカから12,000体以上の人形が贈られ、日本各地に配布されました。次に返礼として市松人形50数体が送られました。ここで国際観光局がどのような働きをしたのかは、まだ調査半ばです。『人形読本』（日本人形研究会 編、雄山閣、1933）には、「人形の国際的使命」と題して国際観光局・局長の佐原憲次の講演録が掲載されています。そして国際観光局発行で「ニューヨーク市長室における日米親善人形使節」という写真による絵葉書があるんです。年代は不明です。そこには日本のニューヨーク総領事、猪俣国際観光局囑託がいて、猪俣国際観光局囑託がアメリカの担当者へ目録を渡しています。だとすれば、国際観光局がアメリカでの実務を担っていたということになりますね。

1930（昭和5）年に発足した国際観光局は平和を希求し、民間の活動にも援助をしましたが、太平洋戦争が始まった翌年その活動には終止符を打たれます。その前、1939（昭和14）年に『国際観光事業概説』という国際観光局が編んだ報告書があります。そこでの結語に、国際観光事業に近道はなく「我々は正々堂々と、一見最も迂遠のごとくしてその実は最も目的に近き所の道をいくほかはない」として、最後に「そして我々に欠くべからざるものは澄める眼と熱き心とである」（傍点・引用者）と結んでいます。最初、このくだりを読んだとき、目が点になりました。国家機関の報告書にこんな文言が書かれた。背後にはいったい何があったんだろう。そしてここまで書かずにはいられなかった心情とはなんだったのだろうか。国際観光局というのは、ちょっと不思議な機関ですね。

グラフ誌そしてプロパガンダ

「FRONT」と「NIPPON」を紹介したいと思います。どちらも対外向けのプロパガンダを目的としたグラフ誌でした。

その前に名取洋之助を取りあげなくてはなりません。名取洋之助は日本で初めてのプロの報道写真家とっていい人です。生いたちとしては1910（明治43）年生まれで、光吉さんよりは6つ年下です。大会社の社長の息子で特に母親から溺愛され、慶應義塾の普通部に通っていたのですが、まったくの不良で、予科には進めませんでした。じつは同学年にもう1人不良がいて、それは岡本太郎。

慶應義塾の予科に進めないで、富士電機の社長である父親はジューメンズ社との付き合いもあることから、ドイツへの留学、いやむしろ厄介払いというべきか、それを勧めます。で、18歳で母親と一緒にドイツにいき、ミュンヘンの美術工芸大学で学び、写真を知るんですね。それでカメラマンになろうとして、努力をするけれどまったく芽がでない。そのころ、後に名取洋之助の妻となるエルナ・メクレンブルグと出会います。そうしたら近所で火事があった。名取はさっそくカメラでその現場を撮影して新聞社にもっていくんですが、こんな写真は誰でもが撮っているといわれ、採用されませんでした。

ところが翌日、恋人のメクレンブルグが焼け跡で何かを捜している人物を何枚かのカットにして撮影したんです。それをもっていったら即採用。そこで誤解が生じ撮影者は名取洋之助となり、このことが機会となってウルシュタイン社の契約カメラマンとなり、1932（昭和7）年、日本に特派員として帰ってきます。

そこから日本での名取洋之助の活躍が始まるんですが、まず報道を目的として「日本工房」を立ち上げます。ほとんど名取の個人会社だったようです。そこに戦後活躍する若き木村伊兵衛、伊奈信男、原弘、岡田桑三などが集まりましたが、ほどなく分裂してしまいます。分裂の原因は、メクレンブルグが日本工房の社員たちが怠けているようにしか見えなくて、クビを進言するんですね。で、名取が岡田桑三をつかまえて辞めてほしいというと、それならばと木村伊兵衛、原弘など中心メンバーがゴソッと抜けたんです。抜けた連中は中央工房を作り、それが東方社となって「FRONT」の刊行に繋がっていきます。

名取洋之助は残ったメンバーとあらたに社員を募集して事業を継続していきますが、そのあらたな社員が土門拳なんです。こちらは「NIPPON」を出していくことになります。

「FRONT」の創刊号の表紙です。この人物は、戦艦「伊勢」の水兵です。



「FRONT」は、東方社が発行しました。東方社は1941年に創立。社屋は、小石川区金富町にありましたが、後に九段下の野々宮ビルに移転します。理事長は岡田桑三。理事に林達夫、岡正雄、岩沼忍、小幡操。常務理事に鈴木清。写真部主任・木村伊兵衛、美術部主任・原弘、という陣容でした。匆々たるメンバーです。創刊号は1942年、昭和17年。すでに太平洋戦争が始まっていました。15か国語に翻訳され、69,000部印刷。印刷は凸版印刷です。

陸軍情報部がバックについていたのになんで創刊号が海軍なのだとすると、こちらのほうが先にまとまったので出したということです。当然、次号は陸軍になります。

伊勢はちょっと不思議な戦艦で、戦艦から改装されて世界でもまれな前半分が戦艦、後半分を空母にした航空戦艦になるんです。ちょっとSF小説にでてきそうな代物です。その改装が1942年12月から始まるんですが、「FRONT」はその直前の取材となります。しかし航空戦艦としての活躍はなかったに等しかった。むしろ戦艦の欠点と空母の欠点を合わせた艦でした。主砲を一斉射すれば艦は傾きますので飛行機は飛び立てないし、半分は戦艦なので飛び立った飛行機は普通の空母のように着艦できない。海に着水するか、他の艦へ降りるか。しかも搭載機はそんなに積めないの

す。なんでこんな意味のない船を作ったのか、わかりません。むしろ最大の功績は1945年の2月に南方から石油をはじめ軍事物資の輸送にあたり、アメリカ軍の攻撃をかいくぐって無事帰還したことです。

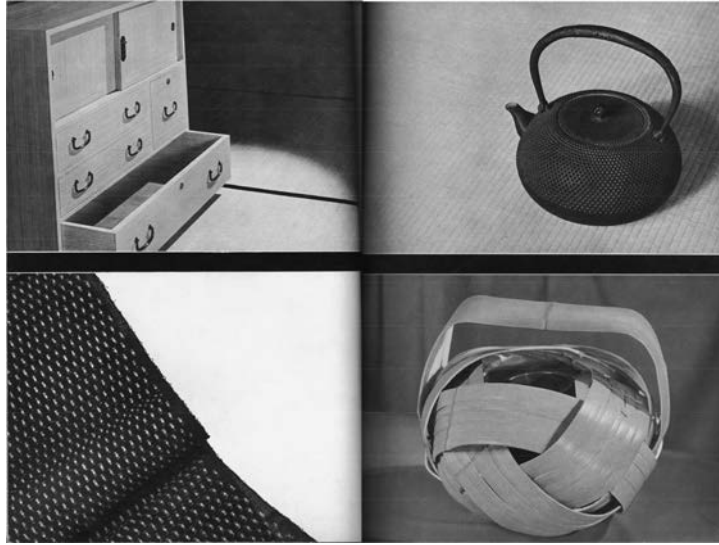
写真はまず海軍の検閲を受けて、かなり修正が施されています。けっこういじっています。元の写真がわかりませんから何ともいえないのですが、左右逆版、カラージュ等々の処理はされていると思われます。

「NIPPON」に移ります。「NIPPON」は日本工房が発行。日本工房は、国際報道工芸株式会社、そして国際報道と社名を変えていきます。会社も銀座・交詢社ビルから木挽町の鈴木ビルへと移転していきます。この会社は名取洋之助の個人会社のようなのですが、鐘紡が出資、丸善が発売元で、バックに内閣情報局がついていました。美術に山名文夫、河野鷹思、亀倉雄策、熊田五郎など。写真には土門拳、藤本四八、沼野謙、松田正志など。そしてブレーンとして大宅壮一、伊奈信男、長谷川如是閑、谷川徹三が名を連ねていました。創刊号は1934年、昭和9年です。これも英、独、仏、スペイン各国語で出版され、全部で36冊を刊行しました。刷り部数は正確にはわかりません。創刊号は5,000部刷ったという証言があります。印刷は共同印刷。ただ共同印刷は2色機でしたので、2色刷って、また2色刷るという手間がかかりました。



これは「NIPPON」の3号です。表紙が「FRONT」とはだいぶ雰囲気が違いますね。飛行機の形になっていますが、風景写真を飛行機の形に切っているんです。そうしたちょっとデザイン的に凝ったことをしています。「FRONT」と違うのは他にもあって、このように広告が入っています。三越の広告があります。キリンビール、資生堂とか、こういうコマースが入っています。

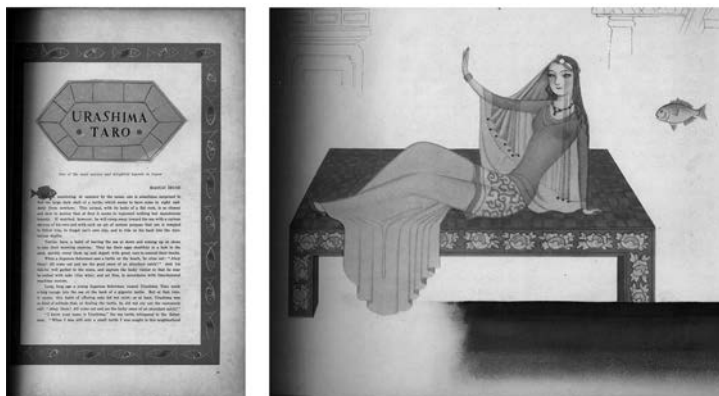
工芸品というか、手細工で作ったのをきちとした写真で撮っています。たぶん土門拳の撮影でしょう。「NIPPON」には、こうしたこまごまとしたことを丁寧に写真によって知らせようという意図を感じます。



それから、この着物のイラストは藤田嗣治が描いています。サインも入っています。光吉さんがここでは韓国の舞踊について書いています。



これは「浦島太郎」です。文章は井伏鱒二。挿絵は非常にたおやかで、すごくいいなと思います。こういう昔話が、毎号ではないんですけど入っています。絵を描いたのは山名文夫。



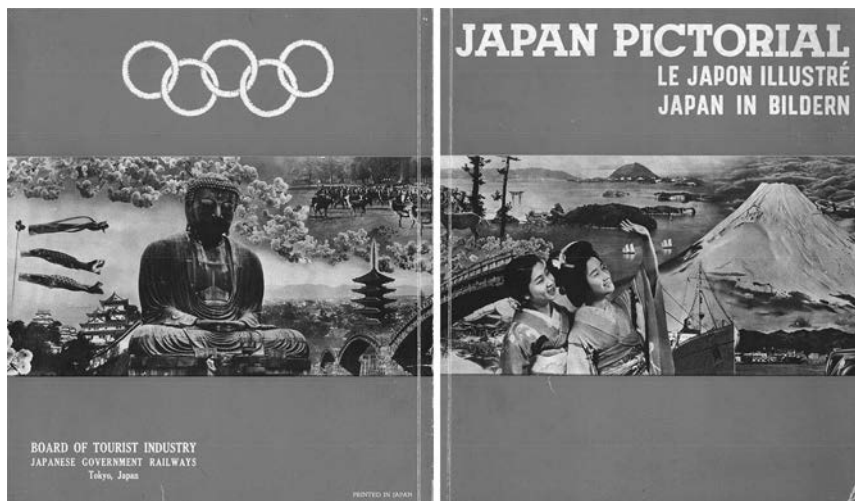
「Travel in Japan」の創刊号をここに並べてみると、ずいぶん温和という印象ですね。春の桜にちなんでの記事が並んでいます。ひな祭りや鯉のぼりなども後半で紹介しています。型どおりとってしまえばそうなのですが、このアグレッシブではないことが編集の基本にあったのではないかと思います。「FRONT」や「NIPPON」に馴染んだ目で見るともの足りないところがあるかもしれない。でも、これはこれで日本の紹介をしていました。



国際観光局課長の井上万寿蔵は、「露骨な外交工作や政治宣伝がなんらの効果をもたらさぬ場合でも、婉曲な観光宣伝だけは大手を振って外国にはいっていきるのである。そこには観光事業の弾力性があるのであり、いかなる時局にもめげぬ強みがあるのである」（『観光読本』無何有書房、1940）ということを行っています。このことは名取洋之助も似たようなことをいっていました。

「FRONT」「NIPPON」を挙げたのは、この2誌が突出していたこともあります。光吉さんがこの2誌にかなり関わっていたことです。「FRONT」では理事長の岡田桑三、写真家の木村伊兵衛とはよく付き合っていたし、「NIPPON」では、何度も寄稿しています。さらに1942（昭和17）年には日本工房が社名を変更した国際報道工芸社に入社しました。その付き合いはさかのぼると、「Travel in Japan」を創刊する前年、1934（昭和9）年に国際報道写真協会なる組織ができるんです。会員は、木村伊兵衛、原弘、伊奈信男、岡田桑三、林謙一、渡辺義雄といった写真家、デザイナーに連なって、光吉さんが入っています。

「Japan Pictorial」です。これも国際観光局で1937（昭和12）年の刊行です。表裏の表紙を広げると写真が繋がっています。これは高さ24メートル、横幅18メートルという写真壁画で、同年のパリ万博で日本館に展示されました。



この写真壁画は53枚の写真を使って原弘がデザインしました。原弘は国際観光局にあった1,000枚から30枚ほどの写真を選んで、それでも足りないので木村伊兵衛などから提供してもらい、さらにあらたに撮影して53枚にしたんです。ですが、この53枚でいきなり横18メートルの壁画にはなりません。まず10分の1のスケッチを作って、それを元に何段階にも分けて順番に大きくしていきました。できあがっても紙1枚では強度が足りませんから、裏打ちをしました。工期1か月。木村伊兵衛によると現像液300リットル、定着液300リットルを使ったといっています。担当は光吉さんでした。木村伊兵衛が証言しています。1937年ですから、光吉さんとしては国際観光局での最後の仕事となります。

舞踊評論家としての活躍

1940（昭和15）年、つまり皇紀2600年。日本中が奉祝行事で盛り上がり、芸能もそれにあわせて式典が開催されました。そのなかで光吉さんだけが創作洋舞「日本」3部作の台本を書いて、東京宝塚劇場で1940年9月に上演されました。第1部が「創造」、深井史郎・作曲、江口隆哉、宮操子・振付。第2部が「東亜の歌」、江文也・作曲、高田せい子・振付。第3部が「前進の脈動」、高木東六・作曲、石井漠・振付という構成でした。

光吉さんの、この3部作は4月に上演予定だったんです。しかも呉泰次郎という作曲家が、すべてにわたって作曲をすることになっていたんですが、光吉さんの台本が遅れに遅れ、4月になってもその一部ができただけだったんですね。それで呉泰次郎が辞退することになり、この芸術祭を統括していた大日本文化中央連盟が急遽、作曲

を3人の方に割り振り、9月に上演ということになったというわけなんです。

同年の「三田文学」の10月号に、この台本が全文掲載されています。読むと、なんでこんなに時間がかかったのかわからないですけど、ちょっと冒頭部分を紹介しましょう。

1 神々の誕生

A・天つちのわかれ

火のかたまりのようならんらんたる球体が強い光芒を放って中空に渦巻いている。
やがてそれは青い混沌たる流動するものに溶解してゆき、あるときは疾走し、
あるときは淀みつつ、美しく揺曳する。
ついで流動体の中央を横に貫いた一條の線を境として、それは上と下に徐々に
開かれてゆく。

B・創造物の誕生

天と地が分かれ、さんさんたる光がはてしなく降りそそぐなかに、男女二柱の
神が忽然と誕生する。
神々は静かに浮橋の上を歩み、輪を描く。
島が形成される。
神々は浮橋から島に降りる。
相對して立った神々——
男の神は右へ、女の神は左へ、ゆるやかな半円を歩んでまわり会い、結合の踊
りを踊る。
これを二度繰り返す。
この踊りのあいだに八つの島が形成される。

ということで舞踊が始まっていきます。古事記そのままじゃないですか。ちょっと舞踊を知っている人にこんなのでいいのかと聞いたことあるんですが、そうしたら「いや、台本ってそんなもんだ」といわれたんですけど。どんなふうにダンサーを動かしたらいいのか、背景や舞台装置については、何も書いてなくて、光吉さんに悪いけれども、どうしてこんなのに時間がかかったのかわからない。でも、この後書きを読むと、

私が特に留意したことは、テーマなり、その展開なりについて、前もって舞踏家側の完全な共感を得ておくことであった。この緊密な共感のうえにおいての

み、はじめて舞踊家の自主的な創作意欲の発動を期待しうるからである。作者の独りよがりの空想を押しつけることは絶対に避けなければならない。

だから打ち合わせが必要だったと。それは、そうだろうと思います。こんな台本ではわからないでしょう。

それで、最近約二十年間の現代舞踊に示されたいろんな手法をできるだけ多く吸収することに努めた。

とも、いっていますが、何が手法なのか、どのようなことが現代舞踊特有のものなのかは、ここでは明らかにされていません。それで深井史郎の曲が、最近、CDになっていて、それを聞きながら、この「日本」3部作の舞台写真（『皇紀二千六百年奉祝芸能祭』国際報道工芸、1942）を見ていくと、なんでこれが国威発揚になるのかちょっとわからないですね。これをもって国威発揚で戦時に協力したとかいわれても、どうかと思います。



この深井史郎というのは優秀な作曲家でした。フランスの象徴派を思わせる美しい曲を書きましたが、評論『ストラヴィンスキイ』（普及書房、1933）を26歳で書いています。ちなみに戦後、片岡千恵蔵主演、映画『八ツ墓村』の音楽を担当しています。

その次の江文也は1910年に台湾に生まれ、日本に留学して山田耕筰の門下生になり、作曲家になるんです。このころは戦時でしたから、日本と中国を行き来することになるんですが、戦争が終わると彼は日本に帰れなくなってしまいます。そして文革が終わったころ病気で亡くなります。非常に起伏のある人生を送った人です。江文也

は作曲だけでなく、声楽でも活躍しましたし、孔子の音楽論を論じた『上代支那正楽考』（三省堂、1942、東洋文庫、2008）も著しています。

高木東六は戦後、テレビなどで活躍した作曲家というよりはタレントの印象が強い人ですが、若き高木東六がここに起用されました。この曲がどのようなものであったかは、わかりません。

振付の江口隆哉、宮操子、高田せい子、石井漠は、この時代のトップダンサーたちです。この人たちもそれぞれ話していくとおもしろいのですが、今日はここまでしておきます。とにかく申し上げたいのは、戦前の光吉さんにとって国際観光局であれ、写真であれ、舞踊であれ、どの分野でも个性的で、後の時代に大きな仕事をする駿才と出会っていた、仕事をしていた。そういう体験を積み重ねていたということです。

日本少国民文化協会

1941（昭和16）年12月8日、日本海軍は真珠湾に停泊していたアメリカの艦艇を攻撃します。空母6隻、戦艦2隻、巡洋艦3隻、駆逐艦9隻、合計20隻。攻撃に加わった艦載機およそ300機という大仕掛けな、しかも練りに練った作戦でした。この攻撃は、あれこれ事情は複雑に絡んでいましたが、結局、宣戦布告の前におこなわれたことによって、卑怯な日本というイメージが定着されます。そして日本はこのことによって、満州事変、日中戦争を経て太平洋を舞台にした太平洋戦争へと突入します。しかしこの初戦の勝利により日本中は異常に沸き立ちます。その12月の23日、社団法人日本少国民文化協会が発足し、翌年、財団法人日本少国民文化協会となります。ここには子どもの文化をとりまく多くの関係者が集められました。日本少国民文化協会は、戦時下の子どもたちがいずれ忠良な兵士となるように錬成しようとするを目的としていました。国家総動員が子どもたちにも降りかかってきたのです。そしてそのために、子どもがふれる書籍やさまざまな分野に統制の目が注がれることとなります。

そこで集められたメンバーの記録が「社団法人日本少国民文化協会要覧」という冊子にあります。それを見ると理事など幹部には大学の教官、官僚、軍人の名前が並んでいて、その下に各部会があり、その文学部会に光吉夏弥の名前があります。そして石井桃子の名前もその文学部会にありました。光吉さんがなんで文学部会に入ったのか。光吉さんのキャリアからいえば舞踊部会のほうが適切ではなかったかと思えます。というのも先ほどの創作洋舞「日本」で参加した舞踊家が、この舞踊部会にはず

いぶん参加しているんです。このあたりから光吉さんの一種の舞踊離れがあって、それよりも子どもの本への関わりが少しずつはっきりしてきたのではないのでしょうか。

日本少国民文化協会は、機関誌「少国民文化」を刊行します。創刊号は、1942（昭和17）年の6月。140ページの厚い本なんです、それが最終号である1944年12月号になると、32ページの薄い冊子になってしまいます。そういう「少国民文化」ですが、光吉さんはここに4本もの寄稿をしています。

- ・「文化財としての少国民舞踊」（1942年9、10、11月号）
- ・「翻訳者の反省」（1943年1月号）
- ・「南の絵本」（1943年4月号）
- ・「大東亜少国民文化の建設」（1944年3、5月号）

「翻訳者の反省」には、カードに書き込むことでのデータの作り方をここで報告しています。そして今の日本の翻訳が、いかに基準がなくてでたらめかということはかなり怒った調子で書いています。その矛先は何なのかはすぐさまわからないんですけども、もっとちゃんと筋の通った翻訳が必要だというのは、まっとうな主張だと思います。

それから、「南の絵本」。これはタイ、ビルマなどアジアの南方の国を舞台にした絵本が14冊あって、それらを論評していくのですが、思いつきで刊行されている。何を子どもに親しませようとしているのか制作意図が貧弱。服装にしてもちゃんと調べて描いていない。印刷もひどいと、ダメ出しのオンパレードですが、唯一、絵本ではないのですが絵物語として2冊取りあげて一応の及第点を与えています。

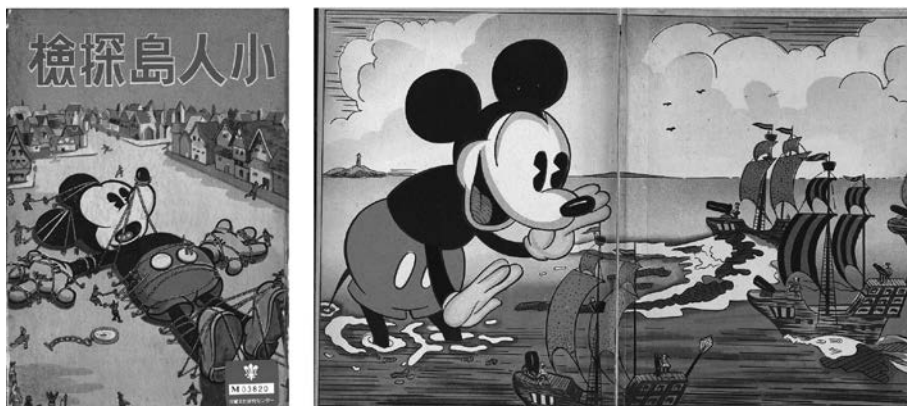
「大東亜少国民文化の建設」も「南の絵本」を受けてのことか。冒頭で大東亜会議における五大共同宣言にふれるんです。そこでは、アジアの国々の文化が今後いかにあるべきかが示されたとして、それは良いことだと持ち上げるんです。そして、ここには「文化侵略的な微塵のかけもなければ、力の支配を思わせるものもない」と、現実はこの逆であるのにもかかわらず、そういうんです。しかも「少国民文化」なるものは日本ではここ数年のことだと。他のアジアの諸国にはないのだといって、結語として、まず近代国家として成立し子どもは子ども独自の世界が認められなければならないと主張するのです。日本少国民文化協会の目的は、天皇制のもとで聖戦を戦える次世代の錬成にあったはずで、近代国家のもとでの子どもが子どもとして認められる、そういう世界ではさらさらなかった。むしろこのようなものの言い方は欧米のもので、戦後はっきりと主張されていくものでした。ですから、よくこのことで検挙されなかったのかと思います。あるいは少国民をどう善導するかの記事ばかりのなか

で見過ごされていたのか。それを承知で書いていたのか。このへん、光吉さんのしたたかさを感じます。

宝塚系の雑誌「東寶」「歌劇」「エスエス」などに12本もの寄稿を果たしていることもわかりました。そのなかで「新体制と舞踊」（「歌劇」1940年9月号）という文章のなかで新体制という言葉が叫ばれ、非常時に飲み込まれようとしているとき、今までにない戦時色の強い作品が上演されることが問題なのではなく、そういう状況になった今、今まで普通に見てきた舞台の意味が変わり、鑑賞が変わってしまうことが問題なんだと指摘しているんです。これは戦後、光吉さんが訳した『ちびくろ・さんぼ』が最初非常に高い評価を受けながら、黒人差別の絵本という非難を浴びて絶版になった経緯を連想せずにはいられません。作品は常にある文脈のなかで鑑賞されるんです。

ディズニーの紹介

これは光吉文庫にありましたが、光吉さんはディズニーの翻訳を1942（昭和17）年にやっています。ミッキー・マウスがでてくる『小人島探検』（文林堂双魚房）です。



（白百合女子大学児童文化研究センター所蔵）

ただこれが本邦初訳とはいえず、昭和16年に『ミッキイノ大勝利』（三田俊介訳、三鷹書房）がでています。光吉さんは後書きで30数冊所有していることを書き記しています。とにかく昭和10年代、ミッキー・マウスは人気者で、偽物というか、日本人が描いたミッキー・マウスがあちこちで使われていました。ついでに申せば、村岡花子も『村岡花子童話集』（金の星社、1938）で、「ミッキー・マウスのお手柄」というタイトルでの創作があります。

そして戦後間もない1949（昭和24）年、光吉さんが編集担当となって「スーパーマン」がコミック社から出版されました。売れ行きは芳しくなく8号で終刊となります。これも早すぎた出版でした。

もう少しこのへんの事情を付け加えておきましょう。まず文寿堂という出版社がありました。文寿堂は「金と銀」という子ども向けの雑誌を出すのですが、その出版にあたって中央公論社で「少年少女」を編集していた光吉さんを引き抜くというか、どうも中央公論社でいざこざがあって光吉さんが嫌になり、中央公論社を辞めるとスタッフの2人の社員も同時に辞めて、そのまま文寿堂に入社して担当することになるんです。ところが戦後まもなくのころ、1948年ですから、出来映えは良かったものの売れなくて、この1948年末、文寿堂は倒産します。ところが別にコミック社という出版社があって、かつての「FRONT」のメンバーが集まっていた。で、光吉さんを編集長にして「スーパーマン」の翻訳出版を始めたというわけです。無論、光吉さんが編集となれば「スーパーマン」の表紙の文字デザインは、原弘がやっています。当初、3万部発行するもなかなか売れず、8号をもって終了。コミック社も倒産します。

このようにして紆余曲折はあるもののディズニーやアメリカのコミックの日本への紹介を考えたとき、光吉さんのやった仕事はもっと評価されていいように思います。意外と言及されていないんですね。

『小人島探検』の後書きで、光吉さんはこのようにディズニーを評価しています。

ディズニーがつくり出したミッキイ・マウスは世界の子供をはじめおとなにまであらゆる年齢の人に愛されて、永い喝仰を浴びてきましたが、これはディズニーの描く漫画的な世界が、あくまで明朗で、健康で、生命的な澆刺さにみなぎっているからであります。（中略）ミッキイが常に弱者の味方であり、敢然として強者に立ち向かう正義の士である性格も、ミッキイ映画の健康性の大きな要素となっていますが、要はディズニーがあたたかい愛情をもったすぐれた童話作家だからだと、私は思っています。

あの戦前の、しかも少国民文化協会が仕切っていた子どもの本の世界で、このような指摘は健全であるとともに、時代を超えての普遍性をもっているように思います。しかも、

ニューヨークの近代美術館の「舞踊文庫」の壁には、世界の舞踊界の代表的な人物の写真がずらりと掲げられているが、その中にワルト・ディズニーの存在

がひとつ異彩を放っている。ディズニーの作品に舞踊的な要素が極めて多いことを思い起こせば、これは当然のことで別に不思議はないわけだが、ディズニーに対する舞踊界の高い評価を最初に公けにしたものとして注目されている。

(「レビュー・舞踊の新世紀」「エスエス」1940年6月号)

ミッキー・マウスにしろ、ディズニーのアニメの登場人物はタップを踏んだりして、踊っています。その振付はディズニーその人がやったことで、アニメとはいえ振付師としての評価があった。こういうニュースをきちんと紹介する光吉さんは、やはり具眼の士というべきでしょう。

さて、先駆的な絵本論を発表した「生活美術」(1943年9月号、アトリエ社)に移るんですが、「生活美術」はこれだけを調べていっても興味深い雑誌です。もともとは北原白秋の弟・北原義雄によって創刊されたもので、当初は「アトリエ」でした。ですが1940(昭和15)年に和風な誌名「生活美術」に変えさせられ、その後1943(昭和18)年11月号をもって終刊となります。終刊号での編集後記では、はっきりと「廃刊」と記し、本文を黒枠で囲っているのには感じるものがあります。

光吉さんの「絵本の世界」で紹介された絵本については省きます。むしろ以下のような結語に注目したいです。

各国の一流絵本がすべて、まともな本格的な絵をもって描かれていることをいっておきたい。

子供の理解をおとなの頭で計測して、細部を省筆したり、子供が好みそうな絵というものを想定して、変に子供向に描かれた絵などというものは、事実、ひとつもないのである。

ここに舞踊についての発言で「作者の独りよがりの空想を押しつけることは絶対に避けなければならない」といったことや、「まず近代国家として成立し、子どもは子ども独自の世界が認められなければならない」といったことをつなぎ合わせていくと、戦前において子ども向けの絵本はいかなるものかという概念をほぼ作り上げていたと思います。

戦後の主な仕事

最後に、戦後についてはまだ調査不十分なところがあります。まず空襲にあってやはり光吉さんは絵本を相当数焼失しています。次に、戦後すぐさまたくさんの出版社が生まれ、同じような薄い粗雑な紙に印刷された子ども向けの雑誌が雨後の竹の子のように出版されます。そのような雑誌に翻訳が主ですが寄稿しています。何故こんなにあちこち仕事をしたんだらうと思うと、お父さんの元次郎さんは、日本綿花の社員第1号としてボンベイに赴きました。そして関連のいくつもの会社の顧問などに就任しました。たぶん、そのころそうした会社の株をかなりもつことになったのではないかと想像します。でなければ頼山陽の研究に没頭できなかつたらうし、光吉さん自身、舞踊の評論家になろうとしたとき、やはり実際の舞台を、しかも欧米の舞台を見なければならなかった。そして文献も相当数読まなければ、舞踊の歴史も書けなかった。ところが戦争が終わり、GHQによる財閥解体などがすすむなか、もっていた株券はただの紙切れになったのではないか。だからこそ、さまざまな媒体に原稿を書かなければならなかった。それが一息つくのは、やはり岩波書店での「岩波の子どもの本」シリーズの編集出版だったと思います。そういう生活ということでも、この岩波の企画は大きな意味をもっていたのではないかと思っています。

そこで粗雑な紙に刷られた薄い雑誌、そしてバレエ団が来日して公演したときのパンフレット。いずれも図書館などには収蔵されていません。パンフレットは公演の日配れば、それでお終いですから。だから古書店で見つけたらすぐに手に入れて、こつこつ集めていくしか光吉さんの全貌には迫れないです。

例えば、1964年5月1日～24日まで草月会館ホールでおこなわれたジーン・アードマン女史の〈6人を乗せた馬車〉公演パンフレットがあります。これはジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』を下敷きにした公演でしたが、パンフレットは以下のような内容です。

- ・あいさつ：駐日米国大使 エドウィン・ライシャワー
- ・〈6人を乗せた馬車〉解説：光吉夏弥
- ・メッセージ：ジーン・アードマン
- ・〈フィネガンズ・ウェイク〉の鑑賞：西脇順三郎
- ・ダンサー及びスタッフの紹介
- ・〈6人を乗せた馬車〉の登場人物と美学的考察：ジョーン・ダワー
- ・オフ・ブロードウェイ見聞記：松浦竹夫

・アメリカ演劇とオフ・ブロードウェイの過去と現在：植草甚一

これを見ても、光吉さんの舞踊の世界での位置というか、それは伝わってくるのではないのでしょうか。舞踊についてもひとつ付け加えたいのは、『演劇映画放送舞踊オペラ辞典』（白水社、1955）です。ここで光吉さんは舞踊関係の執筆者として、署名での解説が40項目。他にも無記名で相当数、執筆しています。これもまた大きな仕事だといえましょう。

戦後ついでにもうひとつ付け加えると、瀬田貞二が編集した『児童百科事典』（全24巻、平凡社、1951～56）、この編集委員に加わっていましたが、そのなかでの「児童文学」の項目を執筆しました。その後、平凡社からは、

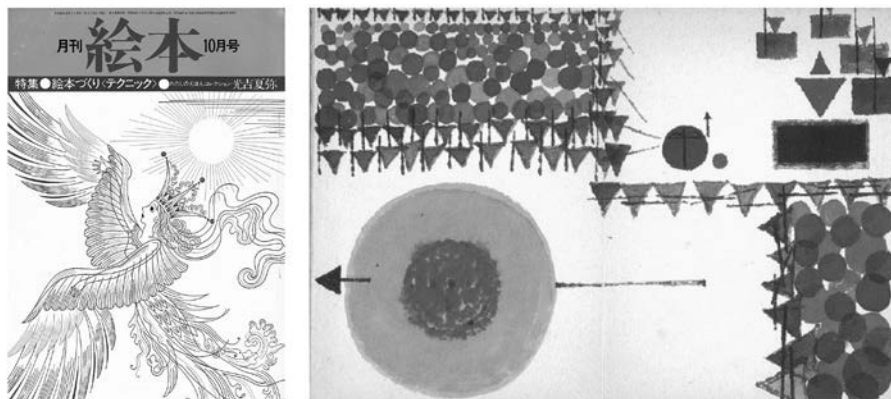
『世界写真全集』全7巻、1956～59

「世界写真作家シリーズ」14冊、1957

『世界写真年鑑』1958～70

という膨大な仕事量が想定できる大きな仕事を続けています。しかし写真は時代とともに変わり、その時代の資料としてその時代に出版されれば、そのままになってしまいます。子どもの本のように何回も増刷されることはありません。子どもの本以外にもこのような大きな仕事が残されていたということ、子どもの本に関係する人たちにも知ってほしいです。

「月刊絵本」1975年10月号には、「わたしのえほんコレクション」というコーナーで、光吉さんのコレクションが紹介されています。膨大な絵本のなかから光吉さんが選んだのは、次ような絵本でした。



（白百合女子大学児童文化研究センター所蔵）

- ・ Boris Artzybasheff “Seven Simeons”
- ・ Alice W Howard, Lynd Ward “Ching=Li and the Dragons”
- ・ Louis Untermeyer, A.and M.Provensen “Tales from the Ballet”
- ・ James Thurber “The Last Flower”
- ・ Warja H. Lavater “Wilhelm Tell”
- ・ Ionicus “Ali Baba and the Forty Thieves”

アルツィバーシェフの『7人のシメオン』は色分けされた優雅な描線が美しい絵本。リンド・ワード描く『チン・リと竜』は、青い色彩が怪しげな雰囲気醸しだしています。光吉さんの中国好きがわかる絵本です。これは『絵本図書館——世界の絵本作家たち』に取りあげられていません。プロヴェンセン夫妻の『バレエ物語』は大判の絵本で、まさに光吉さんご推薦の絵本とわかるものです。ジェイムズ・サーバーの『さいごの花』。絵本というか、コマ割りが各ページになっているような描線の絵本です。主題は深刻なんですが、絵自体はユーモラス。ワルヤ・ラヴァター。スイス生まれのグラフィック・アーティストの絵本、すべて記号化された抽象画の絵本です。これを見ると舞踊譜を連想します。バレエの振付の記録をとろうとして、昔から舞踊譜というものが考えられてきました。人間の動きを抽象化することと、絵本の登場人物の動きを抽象化することにはある近似性を感じます。やはりここにも光吉さんの舞踊に対する感覚を見ることができます。『アリババと40人の盗賊』は、開くと舞台のようにになっている仕掛け絵本です。

光吉さんだから、舞踊に絡んだ絵本をという編集部の注文があったかはわかりませんが、やはり光吉さんらしいセレクトだと思います。そして岩波書店で光吉さんの成しとげた仕事というのは、第1期24冊のなかで13冊があるのですが、その24冊を選ぶにあたっては、「各種のものを取り揃えて、バラエティをつけることができた。絵のスタイルはできるだけ、さまざまなものを網羅し、個性のはっきりしているものを選ぶようにした。また、絵や物語の背景になる地理的な多様さにも気をくばった」（「月刊絵本」1973年6月号）とあり、やはりバランスをとっていたんです。そのうえで、改めて絵本コレクションのリストを見ると、光吉さんの絵本の根底には舞踊があったんだなと納得する次第です。

国際観光局での体験が大きかったにもかかわらず、この国際観光局でのことは今まではっきりしたものではありませんでした。図版も含めていくぶん明らかにできたかと思います。そして、この調査にあたって光吉文庫の資料が大きくものをいったということも併せてここに報告いたします。ご清聴ありがとうございました。

〈参考文献〉

- ・『慶應義塾図書館史』慶應義塾大学三田情報センター、1972
- ・『皇紀二千六百年奉祝芸能祭』国際報道工芸、1942
- ・『ようこそ日本へ 1920-30年代のツーリズムとデザイン』東京国立近代美術館編、東京国立近代美術館、2016
- ・『日本国有鉄道百年史』第8巻、日本国有鉄道、1971
- ・『鉄道辞典』日本国有鉄道、1958
- ・『観光事業十年の回顧』国際観光局、1940
- ・『〈報道写真〉と戦争 1930-1960』白山眞理、吉川弘文館、2014
- ・『わがままいっぱい名取洋之助』三神真彦、ちくま文庫、1992
- ・『先駆の青春 名取洋之助とそのスタッフたちの記録』日本工房の会、1980
- ・『名取洋之助と日本工房 [1931-45] 報道写真とグラフィック・デザインの青春時代』白山眞理・堀宜雄編、岩波書店制作、毎日新聞、2006
- ・『戦争のグラフィズム「FRONT」を創った人々』多川精一、平凡社ライブラリー、2000
- ・『BOOKS ON JAPAN 1931-1972』森岡督行、ビー・エヌ・エヌ新社、2012
- ・『報道写真と対外宣伝 十五年戦争期の写真界』柴岡信一郎、日本経済評論社、2007
- ・『原弘と「僕達の新活版術」活字・写真・印刷の1930年代』川畑直道、トランスアート、2002
- ・『モダンダンス 江口隆哉と芸術年代史』西宮安一郎編、東京新聞出版局、1989
- ・『太平洋にかける橋 日米戦うべからず』木村勝美、光人社、1989
- ・『青い目の人形と近代日本 渋沢栄一とL・ギュリックの夢の行方』是澤博昭、世織書房、2010
- ・『復刻少国民文化』全6巻、エムティ出版、1991
- ・『少国民戦争文化史』山中恒、辺境社、2013
- ・日米学生会議：kjass.net/jasc-japan/about-history.html